

目覚めよ、呪縛を断ち切れ

平和統一 NEWS 57 号 (2013/6 月号)

渡辺 久義

最初に議論の前提となる共通了解点を、デイヴィッド・ウィルコックのあげる 12 項目から、2 つだけ選んで記しておきたい——1. 宇宙は生きていて意識をもつ。2. 人間は全宇宙を通じて存在し、最初から我々を訪問していた。

今、インターネットを通じて、高次元宇宙人や彼らと同じ立場の地上人たちが共通して我々に教えていることの一つは、我々が太古の昔から、ある少数の「暗黒勢力」によって操作され、牢獄のような世界に閉じ込められて生きてきたということである。この者たちは今も存在し、この地球を自分のものと考え、我々を奴隷と考えている。地球の外から我々を観察している高次元人たちは、このことに気付いていない我々に、「目覚めよ、呪縛を断ち切れ」と言っている。今進行中の宇宙的進化（次元上昇）としての意識の目覚めと、我々が支配されていたことへの目覚めが、一つに重なっているのである。（彼ら暗黒勢力は、この「目覚め」を必死になって妨害しようとする。）

3月号「隠す文化から隠せない文化へ」にも書いたように、彼らは、メディア、銀行、教育、（中央・地方）政府、科学、宗教（教会）といったほとんどすべての領域を、これまで巧妙に隠れて支配してきたと言われる。彼らは「イルミナティ」と呼ばれ、宇宙からやってきてこの地球を支配した「神々」（実は異星人）の子孫だと自称する。どのように支配したかと言うと、この神々は遺伝子操作の名人であり、我々の「霊的遺伝子」を分離し、いわば霊的な眼つぶしをして、3次元の物的世界に閉じ込めたのだという。これは信じ難いことのようにだが、ほとんどすべての高次元人が同じことを言っていて、我々は信じざるを得ない。

その結果、我々は「分離」と「二元性」という幻影の世界に閉じ込められた。これも高次元人に指摘されて初めてわかったことである。宇宙のすべては生命的一体性をなして、自分と他者との分離（区別）など本来存在しないのに、我々はこれを絶対的なものと考えて、あらゆる苦しみ（支配、恐怖、復讐、永遠の業）を創り出してきたという。そして征服・被征服、善悪の分裂など、二元分立が現実の当然のあり方だと思い込んできた。人間を蔑むと同時に、一方でこれを神のように絶対化するダーウィニズムの人間観を考えてみればよい。この理論にいかにも根拠がないことが分かって、これを教科書に載せ続けなければ

ならないのはなぜか？ それは人間を奴隷化することを目論む陰の支配者にとって、都合のいい理論だからである。

彼らは本当のことを奴隷たちに教えず、隠すことによって世界を支配しなければならない。ある高次元人はこう言っている——「地球外人と地球人とのこの繋がり、**イルミナティのコントロール下におかれた主流科学**によって、可能な限り隠蔽されてきた。」UFOやETのことを話題にするのは知識人として恥ずかしい、というその恥ずかしさは、「彼ら」の仕掛けたものである。唯物論科学を批判することの罪悪感も、彼らの洗脳によるものだ。実際、批判すれば制裁を受ける。彼らの計画にとって不都合な微生物学者や天文学者が、多数「消されて」いることを知っている人は少ないだろう。警世家のベンジャミン・フルフォードによれば、「彼らは、我々がティッシュ・ペーパーを使うように暗殺を使う。」

彼らは宗教教団であり、自分たちの神を「ルシファー」だと公言している。彼らの大先輩であるアルバート・パイクが1871年にこう書いている——「我々はニヒリストや無神論者を世に放ち、恐ろしい社会的地殻変動を引き起こさせるだろう。その時それは恐怖のうち、諸国家に対し、絶対的な無神論の効果と、野蛮性の起源と血まみれの混乱を見せつけるであろう。そして至るところで市民は、少数の革命家たちから身を守ろうとして、これら文明の破壊者を殺し、大衆はキリスト教に幻滅して、**ルシファー**の純粋な教義の宇宙的な顕れによる純粋な光を受け入れるだろう…」

20世紀の世界は彼らのこの計画の通りに展開した。我々の世界は、ルシファーによって骨の髄まで支配されてきたと言える。そこで、一方にルシファーを自分たちの神だと公言し、民衆をひそかに低次元（3次元）世界に閉じ込めて支配しようとする教団があり、他方、これを見抜いてルシファーを名指しで弾劾し、ルシファーの家系から籍を抜いて本来の神の家系に入籍せよ、さもなければ未来はない、と説く教団が現れたとしたら、ルシファー教団は、メディア、教育界、政治、あらゆる機関を動かして、これを一気に潰しにかかるであろう。現にこれは容易いことであって成功するのは当然と言える。

しかし今、「ディスクロージャー」が間近に迫り、その隠れた構造が透明になる時代環境が整ってきた。無知あるいは恐怖から彼らの走狗のような役をする団体や公的機関は、自分たちが何をしているのか考えるべきであろう。